

剣風



事務局 〒330-0074
さいたま市浦和区北浦和5-6-5
浦和合同庁舎4階
Tel (048)834-8869
Fax (048)834-8879
<http://www.saitama-kendo.or.jp>
(編集責任者 川合育三)

第14号 平成30(2018)年9月1日発行

(題字 元会長 野澤 治雄)

埼玉に根づいた竹屋流と剣道具師としての想い



梅澤 敬育

(竹屋流剣道具師)

今、剣道具はほとんどが外国製になっている中で、剣道具師として埼玉で60年続けてこられた幸せを感じている今日この頃です。

戦後、剣道が復活して7年目の昭和34年に、竹屋流六世鈴木謙伸親方のもとに弟子入りしました。そして、昭和45年の独立まで、親方家族、兄弟子と寝食を共にし、掃除、針使いの基本、布団の仕込み、道具の仕立てを覚えました。その11年の修行のお陰で、今の自分があると思っています。

自分がこの道に入った昭和30年代は、戦前からの剣道の専門家がいて、職人も戦前からの親方が中心でした。自分は父(梅澤照佳)の勧めでこの道に入ったのですが、明治35年生まれの父も剣道の専門家(当時埼玉県警察剣道技官)で、その師が鈴木謙伸親方の父である鈴木祐之丞先生でした。鈴木先生の師は剣聖と謳われた高野佐三郎先生です。ちなみに鈴木謙伸親方は高野佐三郎先生の孫になります。

親子二代、そのような剣道と剣道具という剣道文化の中に身をおけた事が、知らず知らずのうちに「武の心」を肌で感じ、今の自分の剣道具作りの原点になっているような気がします。

剣道具の歴史は江戸時代に始まりました。初めは竹具足から普及していったようです。高野先生の著書『剣道』の中に天保の頃の剣術道具の写真があります。それから幕末期になると、現代の剣道具とほとんど変わらなくなりました。

竹屋流は江戸武術英名録に、刀剣師、甲冑師と共に剣鎗道具師として、神田明神下竹屋源次郎と見る事ができます。武具師として諸大名に出入りしていたと伝えられています。その子弁蔵が二代目を継承し、今の剣道具の元となる剣術用具の製作に携わりました。

明治12年に山岡鉄舟の門人となってから、高野佐三郎先生も竹屋に出入りしていたようです。大正5年12月、高野先生の弟子の鈴木祐之丞先生が東京から浦和に移住し、浦和明信館や学校の指導を引き受け、埼玉の剣道の為に尽力しました。その後高野先生が東京から浦和岸町に移住してきました。その時に、大正12年の関東大震災で水戸に疎開していた、剣道具師名人・竹屋三代目鉄蔵を、浦和に呼び寄せました。鉄蔵は高野一門の仕事をして、高野先生の道具を作りながら改良を加え、「これ以上の改良は必要ない」と高野先生に言われたのが、昭和の初めだそうです。

鈴木謙伸親方は、中富藤吉(二代目弁蔵の弟子)の川越弘武堂に昭和10年に弟子入りしました。独立後、跡継ぎを亡くした三代目未亡人のおまつさんに頼まれ、昭和46年4月竹屋の六代目を襲名しました。

このような歴史の上に今の自分が作る剣道具があります。剣術から剣道に変わってゆく中で、剣術用具も剣道具となっていきました。その過程で、使う側(剣道家)、作る側(剣道具師)が一体になり作り上げてきました。

材料が手に入らなくなるなど、国内での剣道具作りに障害もありますが、武の根底にある「美」を大事に、身に付け、構えた時に立ち姿が綺麗で、かつ丈夫で使いやすい剣道具を、剣道家と共に守っていかなければなりません。徒に形を変えるのではなく、先人の想いを大事に、剣道の為の、剣道の理にかなう剣道具を作っていきたいと思っています。

大会記録

◆中学新人大会

(平成29年11月8、9日・埼玉県立武道館)

▽男子団体 ①川口芝(橋本、平吹、土井、山口、清水)②本庄一③春日部大沼③北本▽同個人 ①浅田真吾(春日部大沼)②清水(川口芝)③朝崎(春日部大沼)③岡本(同)

▽女子団体 ①春日部大沼(横川、丸尾、坪井、望月、小川)②本庄一③さいたま泰平③越谷栄進

▽同個人 ①島田紗莉(本庄一)②柳(北本)③岡野(久喜菖蒲)③臼倉(川口芝)

◆県民総体定通制大会

(平成29年11月15日・埼玉県立武道館)

▽男子個人 ①梅沢悠吾(クラーク記念国際)②新谷(大宮中央)③平賀(同)③竹内(戸田翔陽)

▽女子個人 ①奥崎愛理(大宮中央)②室加(大川学園)③繁田(同)小笠原(同)

◆高校新人大会(1月15、16日・県武道館)

▽男子団体 ①立教新座(山口、杳掛、小泉、中山、鈴木)②城北埼玉③埼玉栄③本庄一

▽女子団体 ①本庄一(小川、松島、横川、佐藤、木全)②川口市立③淑徳与野③埼玉栄

◆第66回都道府県対抗優勝大会県予選

(2月4日・埼玉県立武道館=各部代表)

▽先鋒の部 山口真生(立教新座高)▽次鋒の部 岡本優幸(大学)▽五将の部 武越充(川口)▽中堅の部 植竹倅希(幸手)▽三将の部 平野伸一郎(警察)▽副将の部 内田貢市(東松山)▽大将の部 保坂武志(高校)

◆第10回全日本都道府県対抗女子優勝大会県予選(4月8日・埼玉県立武道館)

▽次鋒の部 ①宮沢彩夏(所沢)②酒井(東松山)③土谷(川口)横山(大学)

▽中堅の部 ①志藤綾子(東松山)②清水(高校)③山村(春日部)③小林(東松山)

▽副将の部 ①村山千夏(警察)②本郷(高校)③武内(大宮)③椎屋(大宮)

▽大将の部 ①市村麻美子(朝霞)②関口(浦和)③越澤(朝霞)

◆第31回全国健康福祉祭交流大会県予選

(4月8日・埼玉県立武道館)

▽60歳以上65歳未満 ①中山良彦(熊谷)②穂谷野(上尾)③青木(朝霞)③弘中(入間)

▽65歳以上70歳未満 ①立山健治(朝霞)②加藤(川口)③臼井(杉戸)③川上(杉戸)

▽70歳以上 ①内田明博(戸田)②福田(入間)③宅島(川口)③櫻井(入間)

◆関東高校大会県予選

(5月1、8、9日・埼玉県立武道館)

▽男子団体 ①立教新座(土井、小泉、柳田、中山、鈴木)②埼玉栄③本庄一③城北埼玉

▽同個人 ①鈴木悠誠(立教新座)②権田(城北埼玉)③久保田(埼玉栄)

▽女子団体 ①淑徳与野(金子、佐々木、濱野、鈴木、高原)②星野③川口市立▽同個人 ①高木カノン(秋草学園)②鈴木(淑徳与野)③大泉(本庄一)

◆第27回県高齢者大会

(5月19日・さいたま市大宮武道館)

▽60歳以上65歳未満 ①藤原辰次(川口)②弘中

(入間)③小林(狭山)③手島(熊谷)

▽65歳以上70歳未満 ①原口亨(蕨) ②川上(杉戸)③下川(久喜)③立山(朝霞)

▽70歳以上 ①伊藤六夫(朝霞)②小能(越谷)③渡辺(東松山)③鈴木(川越)

◆県高校総体

(6月4、25、26日・埼玉県立武道館)

▽男子団体 ①立教新座(北野、小泉、山口、中山、鈴木)②本庄一③ふじみ野③埼玉栄

▽同個人 ①鈴木悠誠(立教新座)②宇田川(埼玉栄)③石田(熊谷)

▽女子団体 ①淑徳与野(金子、佐々木、菊池、鈴木、濱野)②川口市立③埼玉栄③星野

▽同個人 ①鈴木杏奈(立教新座)②木全(本庄一)③金子(淑徳与野)③渡辺(東松山)③鈴木(川越)

◆第6回埼玉県杖道大会

(6月10日・埼玉県立武道館)

個人戦

▽基本の部 ①大貫慎輔(武南杖道会)②細野祥生(埼玉杖神会)奨励賞 岡由紀枝(久喜杖道会) 小林篤紘(埼玉杖神会)

▽初段の部 ①高橋健吾(さいたま杖道会)②戸村修(大宮武林会)③吉野智治(凜清会)③吉口東子(浦和杖道会)

▽二段の部 ①伊藤貴広(彩杖会)②加子晏楓(大宮武林会)③小西亮(彩杖会)③島津有加里(彩杖会)

▽三段の部 ①笹部慶江(久喜杖道会)②平沼みちる(浦和杖道会)③天羽淑子(凜清会)③尾崎福次(久喜杖道会)

▽四段の部 ①杉崎利春(久喜杖道会)②杉崎かずみ(久喜杖道会)③加子瑛絵(大宮武林会)③山田優希(埼玉杖神会)

▽五段の部 ①永井順子(埼玉杖神会)②江口佳寿美(久喜杖道会)③朝比奈辰樹(所沢杖友会)③加子雅夫(大宮杖道会)

団体戦

①久喜杖道会(先鋒・中島佑規子 中堅・杉崎かずみ 大将・江口佳寿美)②凜清会(先鋒・吉野智治 中堅・天羽淑子 大将・山我里予子)③所沢杖友会(先鋒・佐藤陽子 中堅・岡本美智子 大将・原嶋正治)③埼玉杖神会(先鋒・細野祥生 中堅・山田優希 大将・永井順子)

◆県中学総体兼全国・関東大会県予選

(7月30、31日、県武道館)

▽男子団体 ①川口芝(土井、橋本、山口、平吹、清水)②春日部大沼③北本②本庄一

▽同個人 ①清水雅哉(川口芝)②土井(同)③浅崎(春日部大沼)③岡本(同)

▽女子団体 ①春日部大沼(横川、丸尾、坪井、石川、小川)②本庄一③越谷栄進③北本

▽同個人 ①横川さくら(春日部大沼)②木部(久喜菖蒲)③小川(春日部大沼)③坪井(同)

◆全日本都道府県対抗少年優勝大会県予選

(7月15日、県武道館)

▽代表選手 ①白田琥太郎(西入間)②荻谷倅己(浦和)③内田虎太郎(蕨)③中嶋カオル(川口)⑤黒沢諭市(秩父)



全国高等学校定時制通信制剣道大会優勝にあたり

埼玉県女子Aチーム監督 羽生高等学校 永野 雅大

8月6日に日本武道館で行われました、平成30年度全国高等学校定時制通信制体育大会第49回剣道大会において、埼玉県女子Aチームが優勝することができました。埼玉県剣道連盟の皆様をはじめ、高体連、高体連定通部の諸先生方に深く御礼申し上げます。この大会は全日制の大会とは異なり、定時制・通信制の生徒のみの参加で、各都道府県の予選を勝ち抜いた選手達によって競われます。

女子団体は3人制のチームとなっています。予選リーグでは、5校リーグを全勝。全員全勝と破竹の勢いで勝ち上がりました。決勝トーナメント一回戦（準決勝）対愛知県では、キャプテンの先鋒奥崎が2本勝ちをするも、中堅室加が一本負け。流れが相手に傾きかけた所でしたが、大将安田の落ち着いた試合運びから2本勝ちを収め決勝戦に駒を進めました。決勝戦対東京都は、これまでチームに勢いを呼び寄せていた先鋒奥崎が引き分けとなり先行きが危ぶまれましたが、中堅室加が値千金の飛び込み小手で先取。その後面を決め、2本勝ちで日本一に大手。大将安田も勢いそのままに猛攻を仕掛け見事勝利、日本一に輝きました。

今回の大会を振り返り、改めて剣道は人間形成の道であると学びました。定時制・通信制の学校では様々な境遇の生徒がいます。順風満帆な人生の生徒ばかりではないと思います。しかし、苦しい状況でも剣道という一心不乱に打ち込める支えがあったからこそ、成長しているのだと確信することができました。一番になった選手達には、これから一流の人間となってくれることを望みます。最後に、選手一人一人の頑張りと指導・強化していただいた先生方に感謝申し上げ、ご報告とさせていただきます。

全国大会を終えて



優勝の栄冠を手にして

埼玉県立大宮中央高等学校単位制 奥崎 愛理

平成30年8月6日、日本武道館で行われた全国高等学校定時制通信制体育大会第49回剣道大会において、私は女子個人戦と団体戦で優勝することができました。現在は、まだ優勝したという実感が湧かない状態ですが、様々な方からお祝いの言葉をいただき、やっと感動がこみ上げてきました。県の合同練習では、生徒よりも先生の方が多い時もあり、色々な先生方に稽古をつけていただきながら、メンバーと一緒に大会に向けて頑張りました。試合当日は、緊張しながらも11試合を集中して戦えたと思います。小学生の頃から頑張ってきた剣道を、続けるか否か迷った時もありましたが、市之瀬先生と出会えて、もう一度頑張ろうという気持ちになりました。他にも、多くの方々との出会いがあり、その人たちのおかげで私はここまでやっていくことができました。

これまでの剣道人生を振り返ってみると辛いことの方が多く、苦しくて悲しいこともたくさんありましたが、今思えば、あの時苦しい思いをしたからこそ、今があるのだと思えます。今日まで私が剣道を続けてこられたのは、何よりも家族が支えてくれていたからです。剣道を続けてこられて本当に良かった。感謝の気持ちでいっぱいです。



明治43年から着物とともに歩んで108年、 「変わるもの」と「変わらぬもの」

樋口屋四代目
樋口 寛司

みなさま、はじめまして。わたくしは埼玉県鴻巣市常光の樋口屋の樋口寛司と申します。弊社は、明治43年から着物とともに歩んで、今年で108年を迎えさせていただいており私で四代目になります。田んぼの真ん中に立地している全国的にも珍しい着物屋です（笑）。今年は明治150年の記念の年でもあります。弊社も創業150年を目指して一日一日を大事に歩んでいるところです。

早いもので3年前、39歳のときに四代目に就任いたしました。その際華道家、假屋崎省吾さんにいらっしゃっていただいたことがありました。假屋崎さんは華道、タレント活動で有名ですが、ご自身で着物のプロデュースもなさっておりまして、そのご縁からでしたが、一道に大成される方の当然ながらの厳しさと反するやさしさ・お気遣いが印象的でした。

さて、剣道も着物も日本の伝統文化ですね。着物の歴史を振り返りますと、服飾史学者の小池三枝さんによれば、着物は元来「着る物」という意味であり、単に「衣服」を意味する語であったが、幕末に洋服が移入して以降、「西洋服」・「洋服」と区別して、「従来の日本の衣服」を「日本服」・「和服」と呼ぶようになり、さらに「着物」の語にも置き換えられるようになったそうです。時代が進み、日常生活で頻繁に洋服が用いられるようになると、「着物」から「着る物」という本来の意味は薄れていき、「和服」の意味が濃くなっていき、現代での「着物」という語は専ら「和服」を意味するようになりました。

日本で和服という言葉が生まれる明治時代よりもずっと前の16世紀の時点で、日本人が衣服のことを指して呼んだ着物（kimono）が、現在で言う和服を表す語としてヨーロッパ人に知られるようになり、現在ではヨーロッパに限らず世界の多くの言語で日本で和服と呼んでいる物を“kimono”と呼んでいます。明治以前から現代まで使われる別称として、和服を呉服、和服を含む和装類全般を扱う店を呉服店とも呼びます。

また、京染店という、着物のしっかい悉皆やクリーニングを得意とするお店もあります。弊社も創業以来京染店でして、初代は染めや洗張りを自分で行い、二代目で小売りを始め、三代目で取り扱う商品を拡げ増やし、現四代目は、着物イベントやファッションショー、着付け教室等、着用機会を増やしております。

最後になりましたが、「変わるもの」と「変わらぬもの」について書かせていただき終わりにさせていただきます。おかげさまで、明治43年から着物とともに歩んで108年になりますが、「変わるもの」とは、時流に合わせた業態変化で、「変わらぬもの」とは、「着物を通じて幸せ作りのお手伝い」という精神です。今後ともしっかりとした精神で一日一日を大事に歩んでいきたいと願っております。



假屋崎省吾氏と

「少年剣道育成強化実践事例」

浦和剣道連盟会長 小室駿一郎

本連盟の少年は平成30年3月現在260人、17団体に加盟し、日々切磋琢磨し精進をしております。

少年強化の事業活動としては毎年3回、7月・8月・10月に「浦和少年強化練習会」を実施しております。本稿では、少年強化練習会の目的及び強化内容についてご紹介させていただきます。

1 強化練習会の目的

主に剣道の基本・基礎を中心とした訓練を通じて、剣道技術の向上はもとより、「礼法」、剣道での「作法」、「所作事」及び「集団行動」等を指導しながら、我が国の伝統文化としての剣道を少年剣士に伝承していくことを目的として実施しております。

2 強化訓練者と指導者

当連盟に加盟している少年（小学3年生から小学6年生）の中から、約100人の剣士を選抜し、当連盟の強化部に所属する指導者6名で指導しております。

3 強化練習の内容

（1）第一回強化練習

第一回目の強化訓練は、「踏み込み足」と「確実な基本打突の習得」を目標に実施しています。

各学年により練度に差はありますが、共通していえることは、正しく踏み込み足ができなければ、正しく打突ができないということから「踏み込み足」を指導の重点にして指導しております。

特に「しかけ技」の「踏み込み足」と、「応じ技」の「踏み込み足」は異なり、皆一緒ではないことを説明し、理解させ、正しく踏み込み足がで

きるように指導しております。その後、打突を中心とした指導に移行してゆきます。

次に打突の指導では、相対動作を主として、まず「間合い」を理解させ、竹刀の打突部で打突部位を刃筋正しく正確に打突することができるよう反復練習をさせています。

その中での指導重点は「刃筋」の立った打突を習得させるということです。

習得方法としては「約束稽古」「打込み稽古」等を通じて、姿勢正しく、打突行為から残心までの一連の動作を正しくできるよう指導しております。

（2）第二回強化練習

第二回の指導重点内容は「打突の機会」を捉えた技の発出です。主な技としては「出ばな技」（面・小手等）、「応じ技」（面返し胴等）を反復訓練させております。

ここでの指導重点は、習技者が「先の気」で相手を攻め、動作の「起こり頭」を的確に捉えるようにさせるということです。

反復訓練では元立ちの「きざし」（起こり頭）の与え方が重要になってきます。

ここをよく説明をし、示範をしながら指導しております。



最初は相対動作で訓練させ、その後、5人一組等になり、習技者、元立ちを決め、連続で「出ばな技」及び「応じ技」を正確に打突できるよう訓練させております。

特に5・6年生になると悪い癖が現れてきており、その悪い癖を矯正しながら指導しております。

(3) 第三回強化練習

第三回目の強化練習内容は、第一回、第二回の強化練習で習得した技を自分のものとする、体得するための訓練です。

より正確に、的確に打突することが出来るよう「約束稽古」等を通じて習得させております。

第二回強化練習の指導の重点である「打突の機会」を捉えた技を、実践感覚で習得させるために「地稽古」「試合」(一本勝負)等を訓練カリキュラムに入れ、稽古及び試合を通じて「打突の機会」をどのように作り、「起こり頭」どのようにして捉えて技を初出するかを、稽古、基本訓練を通じて示範、指導をしております。

(4) 強化練習の全般

以上、第一回から第三回までの強化練習の柱となる指導重点を紹介しましたが、「礼法」はもちろんのこと、各道場(団体)では学ぶことができない集団での「作法」、「集団行動」等も指導しております。

このほか普段少ない人数と同じ人と稽古という現況の中で、約100人が集まる強化練習は「地力」をつけるための絶好の機会と捉え、「地稽古」を多く取り入れながら「地力」をつけさせ、稽古の在り方等を指導しております。

また強化練習では、「素振り」はもとより、指導者が「打ち込み稽古」「掛け稽古」の元立ちとなり、悪い打突を正しく矯正した指導をしております。

さらには練習会場の広さを利用した「追い込み」訓練も実施し、普段経験できない稽古方法等も経験させながら、足さばきの矯正等に努めています。

4 強化練習の効果

このように系統を立てたカリキュラムで実施した結果、次のような効果が表れています。

- ・「礼法」等の「作法」、「集団行動」がスムーズに出来るようになった。
- ・指導内容の移行がスムーズになり、個々の強化選手をきめ細かく指導出来るようになった。
- ・技術面では「刃筋」の通った打突、特に「強さ」



と「冴え」が出てきた。

- ・「体の移動」等が俊敏になるなど、技術の向上が顕著になってきた。

特に5・6年生の技術の向上は顕著で、大人顔負けの打突をする強化選手もあり、その上達ぶりに目を見張るものがあった。

通常の稽古は剣士の少ない道場環境で稽古していることから、このような剣士を多数集めた強化練習は、あらゆる面での効果が期待される練習方法だと考えております。

5 まとめ

他の強化練習を見るとそのほとんどが「試合」を中心にしたカリキュラム内容になっていると承知しております。

そこで試合に勝つにはまず個々の「地力」をつけることが最重要課題だと考えており、個々の「地力」がなければ、自分より「地力」が下の者には勝てるが、「地力」が同程度、上の者には常に勝つことはできません。

勝つためには個々に「地力」をつけることであり、その「地力」をつけるには、剣道の基本、基礎訓練が必要になってきます。

このことから当連盟の強化練習では試合練習は極力抑えて、剣道の基本、基礎訓練に時間をかけた指導内容にしており、それが将来の技術向上につながり、試合に勝ち、生涯剣道として続けていくことに繋がることと信じて技術の向上を図っております。

剣道を普及発展させるということは大会を多くし、試合を多くすることではなく、剣道の中身、内容を充実させていくことこそが剣道の発展に大切なことであり、本連盟の強化練習会は、剣道を発展させるという意味から目的を得た強化事業であると自負しております。

「我が師を語る」—剣道範士9段小澤丘先生—

剣道教士7段 清水 祐介

私は小澤家から畑を隔てた隣の家に生まれました。小澤家は小澤愛次郎先生、小澤丘先生、小澤博先生と三代にわたる剣道家の家柄であり、小澤丘先生を語るには、丘先生のお父さんである小澤愛次郎先生を紹介しなければならないと思います。

愛次郎先生は文久3年(1864)1月28日にお生まれになり、昭和25年(1950)6月19日にお亡くなりになりましたが、幼児から剣道を修行し、武徳会から剣道範士の称号を授与されており、かつ、興武館道場を建設して、剣道の指導にあたられるとともに、埼玉県県議会議員当選4回、衆議院議員当選5回。特に、星野仙蔵議員とともに、剣道を中等学校の正科に加えることを政府に建議し、国会の協賛を得ることに成功しました。

これは現在、中学校に剣道が正科になった源であると考えます。

私は小学校の1、2年生頃、ときどき小澤先生のお宅に遊びに行っておりましたが、愛次郎先生が縁側で椅子に座って日向ぼっこをしている姿を覚えています。

羽生市の古江神社(通称、毘沙門様)の境内に愛次郎先生の胸像があります。

小澤丘先生は昭和27年から昭和58年まで埼玉県剣道連盟の会長を務められ、剣道範士9段の素晴らしい先生です。昭和26年頃、先生は岩瀬村(現羽生市)の村長をやっておりましたが、昭和27年剣道が復活するや自宅の「興武館」道場で、剣道を教えるようになりました。

興味本位に近所の子どもたちが通うようになりました。最初に兄が通い1年後に私も道場に通い始めました。

そのころ先生は村長をやめて、警察大学の剣道教授に赴任してしまいました。

どうして行政の長をやめて剣道の先生になったのか、やはり剣道家の家柄からなのかな、とも考えました。

「興武館」という道場は、中野にもあるということを父より聞かされました。

「羽生興武館」は明治24年に愛次郎先生により自宅(羽生市桑崎)に創設され、中野の「東京興武館」は昭和9年に開館されたと聞きました。

小澤丘先生の指導は、最初は切り返しのみの指導ですが、必ず面をつけて先生自ら受けて下さいました。

また、防具をつけないで「小手」「面」「胴」を自ら打たして下さる指導でした。

お陰様で、その時の先生の指導により呼吸法が身について、現在の稽古にも無意識に相手の呼吸を感じることが出来、楽に稽古が出来ております。

先生の指導は、実際に打たせることにより、無意識のうちに呼吸法を教えて、機をみて打つことを体で教えて下さったものと思います。

また、練習生が一人でも必ず面をつけて打たして下さいました。先生の剣道に対する情熱は本当に素晴らしいものでありました。

昭和29年には先生が中心になって、羽生の古江神社(通称毘沙門様)の境内で第1回の羽生市剣道大会が開催され、現在まで続いており、今年は第63回になります。

このころは大会の折、先生が元立ちになって



喜寿記念の
愛次郎先生



古江神社境内の胸像



小澤丘先生



自宅前の小澤丘先生



小澤丘先生の書



小澤丘先生90歳

